＜Ⅷ　博物館実習報告＞

令和2年度博物館実習報告

石垣　　悟[*1]

本学の博物館実習は、例年、前期1単位、夏期集中及び後期集中2単位の計3単位という形で開講されている。前者は主に学内で実施し、後者は館園（ないしは本学生活文化博物館）実習と見学実習の形で実施されることが多い。いずれにしても、実習であるから学生が自身で考えながら手足を動かして授業を受けることになる。

しかし、令和2年度は、新型コロナの影響により、従来とは全く異なる形での実習を余儀なくされた。まず大前提として、令和２年度の本学の授業は前期を中心にほとんどがリモートの形で行われた。博物館実習についても原則としてリモートの形で行わざるをえなかった。ここではその概略を報告するが、あくまでコロナ禍におけるイレギュラーな形であり、筆者としては本来あるべき実習の姿ではなかったと受け止めていることを強調しておきたい。

ところで、博物館実習は、学芸員資格の取得にあたって最後に履修する科目である。しかも博物館概論から始まる一連の資格科目はほとんどが講義形式で、博物館実習はその中で唯一の実習形式の科目ともなっている。つまり、博物館実習は、博物館概論以来、座学で学んできた知識の総仕上げとして自分自身の頭と手足を動かして技術的実践を試みる科目といえよう。

新型コロナへの対応を考慮した文化庁は、令和2年度の博物館実習について、「令和2年度における学芸員養成課程に係る博物館実習の実施に当たっての留意事項について」という通知（令和2年4月13日付）をだしている。そこには「例外的に演習等で実習に代えることも可能」「弾力的に検討」と書かれている。要は、令和2年度に限っては特例的に各大学の教員の裁量に任せるということと理解された。この通知と、最初に触れた本学の授業方針との兼ね合いから、本年度の博物館実習は前期、夏期集中・後期集中ともにリモートの形で行うこととなった。

博物館実習は、先にも触れたように、それまでの各科目の総仕上げという位置にあることから、前期で行った内容は各科目のポイントを改めて復習し、必要に応じて学生自身が調べて考えてみる形の課題をこなしてもらった。叩き台としてのテキストを『新時代の博物館学』（2012・芙蓉書房出版）とし、授業の事前と事後に該当箇所を各自で読んでおき、授業時は解説を行いつつも積極的な質疑応答を行い、その後に関連した課題をこなすという形式をとった。

次いで、夏期および後期集中の博物館実習では、テキストの講読を継続しながら、3つの大きな課題を出して授業内で1人ずつ発表してもらう形をとった。3つの課題は、博物館キャラクターの考案、既存博物館の展示紹介とその批評、バーチャル上での展示企画と（ギャラリートーク的）展示解説である。

博物館キャラクターの考案は、前期授業で行った課題の延長にあるものである。前期授業では都道府県レベルで域内の歴史を総体的に扱う博物館をもたない県（富山県、静岡県、愛知県、福岡県、熊本県など）を調べてもらい、仮にそこに歴史を扱う博物館を建設するとすれば、どのような展示を想定し、どのようなキャラクターを作ってどのように広報活動をさせるか、ということを考えてもらった課題である。対象とする県の歴史や文化を調べたうえで、目玉となる博物館資料を想定し、それをモチーフに利用者にアピールできるキャラクターを考案してもらった。調査と広報をミックスさせた課題であり、各自がそれぞれの視点から調べた歴史・文化をベースに個性豊かなキャラクターが発表された。また、キャラクターの誕生日や性格、好物などにも歴史や文化を考慮しつつ設定するなどの工夫もみられた。

既存博物館の展示紹介と批評では、緊急事態宣言が解除された6月以降、一部の博物館が再開したことから、各自で時間を見つけて博物館を見学し、その展示

[*]石垣　悟（いしがき　さとる）令和２年度現代生活学部現代家政学科准教授

の特徴や良い面、悪い面、さらには新型コロナへの対応などについてまとめて発表してもらった。総合博物館だけでなく、歴史系博物館や美術系博物館、科学博物館、子ども博物館、企業博物館など様々な博物館が紹介され、個々に議論することで博物館の種類とその展示の特徴や課題について具体例をもとに理解を深めることができたと考えている。

バーチャル上での展示企画と展示解説は、各自が自由に展示の企画書を作成し、それをもとに企画展示の1コーナーについての解説パネルとキャプションを作成し、展示物（画像）とともに紹介・解説するという課題である。博物館展示論などで学んできた知識を活かしながら各自が個性あふれる展示を作り上げて発表した。あくまで仮想の展示ではあるが、展示期間や関連イベントなどまで考えてみることで、できるだけ利用者の理解を深めるための展示を工夫してもらった。発表は、各自が作成したパワーポイントなどを画像共有しながらギャラリートーク風に行い、互いに質疑応答や批評をしながら理解を深めた。

このように今回の博物館実習は、リモートの形で、テキストの講読・解説と質疑応答に課題・発表を組み合わせて行った。できるだけ学生自身に調べてまとめさせることを心掛けたため、主体的に考えるという点は一定程度クリアできたものと思う。しかし、自らの手を動かすという実践的な部分については画像や動画などを見せながら口頭で説明するに止まった。冒頭述べたように、実習は本来学生自身が互いに協力しながら手足を動かして何かを作り上げていくことに意味があり、今回はその部分が最後までうまく対応できなかった。

筆者自身ついていえば、リモートという形をとったことで、博物館とはどうあるべきか、ということを改めて考える機会ともなった。コロナ禍で「バーチャル博物館」「おうちミュージアム」といった活動を行った博物館は少なくない。それらは確かに今後の博物館の在り方、特に展示等の可能性を示すものであった。しかし、いっぽうでどこか物足りなさを感じたのは筆者だけではないだろう。資料自体と直接向き合うことの意義は一定程度あるということを感じてしまったことも事実である。新型コロナと付き合いながら行った実習は、博物館活動とはそもそもどうあるべきか、何ができて何ができないか、などといったことを図らずも炙り出してくれたのではないだろうか。